〈論　説〉

エコノミクス
第4巻第3・4号
2000年3月

金価値規定論の古典的系譜

—問題史的管見—

中村　廣治

1　問題の所在—二つの国際的貴金属移動

本稿の課題は，マルクス（Karl Marx, 1818-83）の必ずしも注目されていない・次の短い示唆的叙述の理論的含意を，学史的接近から明らかにすることにある。まず端的に，彼の関連する叙述からはじめよう。

▼二つの国際的貴金属移動区別の必要▼

マルクスの金価値に関わる叙述は，二つに大別される。いずれも短いもので，ほとんど示唆の域を出ない。そのひとつが，ここに学史的背景を探る・金価値規定に関する次に掲げる叙述であり，いま一つは，労賃の国民的相違の一因としての金価値の国民的相違への言及である(1)。

「貴金属の流出入に関しては，次に述べることが注意されなければならない。第一には，一方における金銀を産しない地域内の金属の往来運動と，他方におけるその産地から他の諸国に及ぶ金銀の流動およびこれら諸国間へのこの追加分の配分との間に，区別がなされなければならない。」(2)

問題の焦点は，まさしく，この二つの貴金属の国際的移動に「区別がなされなければならない」理由にある。区別されるべき二つの貴金属の移動は，前者が既存の金銀（以下，たんに金という。）の・各国の国際収支に基づく為替相場の変動を媒介とする国際的流出入（振動）であり，後者は新産金の産

金国から非産金諸国への直接的移動とこの「追加分」の国際的配分にほかならない。といってもモデル，というよりむしろイメージとしては，事実上，主として産金国から世界的金融中心国（現実的にはロンドン，つまりはシティ）への流入と，そこからの諸国間への配分が思い浮かべられるであろう。それはともかく，なにゆえにこの二つが区別されなければならないのか。以上の叙述からだけではその理由は判然としない。しかし，この二つを区別することなく，新産金・既存金を問わず，その数量の増減からただちに金＝貨幣価値の落騰を論じる貨幣数量説的見解がその伏線として潜むことは，容易に想像されよう。換言すれば，数量説批判という含蓄である。しかしそれは，叙述の消極的な，いわば裏面からの理解にとどまって，彼の理論自体にとっての積極的な意味は，まだなんら明らかではない。いま少し立ち入って究明を要する所以である。

▼金価値規定論▼

この問題に直接に関連してマルクスは，『経済学批判』（*Zur Kritik der politishen Ökonomie*, 1859）においてこう述べている。

「……金が価値の尺度となるのは，すべての商品がそれらの交換価値を金で評価するからにすぎない。けれども，尺度としての性格の唯一の源泉であるこの過程的関連の全面性は，個々の商品のどれもが，自分と金との双方に含まれている労働時間の割合に応じて金で測られるということ，したがって，商品と金との間の現実的な尺度は労働そのものであるということ，または，商品と金とが直接的交換取引によって互いに交換価値として等置されるということ，を前提とする。この等置が実際どのように行われるかは，単純流通の領域では説明できない。しかし，金銀を生産する国々では，一定の労働時間が直接に一定量の金銀に体化されるのにたいして，金銀を生産しない国々では，回り道をして，いいかえれば国産品，つまり国民的平均労働の一定部分を，鉱山をもつ国々の金銀に物質化された労働時間の一定量と，直接にか間接にか交換することによって，同じ結果が達成されるということだけは明らかである。……」(3)

ここには，二つの金移動を「区別」する視点からではなく，もっぱら，金価値，事実上，新産金の価値が問題とされている。産金国においては，それ

は，その生産に要する労働時間によって規定される。しかし，非産金国における金価値は，その「国民的平均労働の一定部分」を体化した非産金国の「国産品」との直接・間接の等置・交換という「回り道」を通って与えられる，と述べられている。

同じ事態について，『資本論』（*Das Kapital*, Bd. I , 1867）にはこう記されている。

「……ある商品の等価形態は，その価値の大きさの量的規定を含んでいない。金が貨幣であり，したがって，すべての他の商品と直接に交換されることを知っていても，それによっては，たとえば10封度の金が，どれだけの価値をもっているかを知ったことにはならない。すべての商品と同じように，金は，それ自身の価値の大きさを，相対的に，他の商品で表現するほかはない。それ自身の価値は，その生産に要した労働時間によって規定される。そしていっさいの他の商品の一定量で表現される。これらの商品にも同一量の労働時間が凝結している。このように金の相対的な価値の大きさの確定は，その生産源でなされる直接の物々交換で行われる。それが貨幣として流通に入ると同時に，その価値はすでに与えられている。……」(4)

ここで明示されていることは二つ。金も生産に要する労働時間によって価値が規定されること，金の相対価値は，生産源での商品としての金と他のなんらかの商品との「物々交換」で確定され，金が貨幣として流通に入るときには，「その価値はすでに与えられている」ということ，これである。

以上からマルクスは，他の諸商品と同様に，金価値はその生産・再生産に要する社会的必要労働時間によって規定されるが，その大きさはこの労働時間によって直接には表現されえず，金と交換される他の諸商品量によって相対的にしか表現されえない，というのである。「価値形態」論の深化が『批判』との微妙な相違をもたらしているのである。

▼金（＝貨幣）のひとつの特殊性▼

しかしながら，貨幣としての金と他の諸商品との間には，ひとつの注目すべき相違がある。貨幣としての金以外の他のすべての商品は，毎回（毎期），流通界に新たに現れてはそこから立ち去る。換言すれば，それはフロウとして流通界に登場し，このようなものとしてそこから姿を消し，生産（＝生産

的消費）過程または（個人的）消費過程に入る。それゆえ，毎回新たに流通に登場する商品は，毎回再生産されなければならない。それゆえ，商品の価値は，新たな生産＝再生産に要する労働時間によって規定される。その労働時間は，前回流通に入ってそこから退場した同種商品の生産に要した労働時間に等しいとは限らず，また本来それと関係がない。これに対して，貨幣としての金は，退蔵貨幣として流通外に堆積されるのみならず，固有に流通手段としての貨幣も，流通界に滞留し，いわばストックとして流通内にとどまり続ける。上掲・第三の引用文は，このような事情の相違にもかかわらず，それと無関係に，貨幣（＝金）価値は，他の商品と同様に，新たにフロウとして登場する金商品＝新産金の価値によって規定される，と説いていることを意味するであろう。

とすれば，退蔵貨幣を含めて世界中に存在する厖大な金ストック全体の価値が，そのストックに比すれば，通例の場合，ごく僅かの量の新産金の価値によって，即時的にか究極的にか再評価される，ということになる。この帰結は，彼の価値論が一般的妥当性を保つためには，論理上，必然であろう。

してみれば，貴金属の二つの国際的移動を「区別」すべきだと説く・彼の意図の少なくともひとつは，金価値規定に彼の価値論を貫徹させる理論的な枠組みとして，この二つを「区別しなければならない」，と考えたことにある，と推論できるであろう。このように理解してよいとすれば，その「区別」の指摘は，これに基づく「経済学批判」として顧みれば，この問題についての史的系譜に，彼としての決着を与える意味あいをも，合わせもつことになろう。

本稿の意図は，この側面を主要な環に即して，具体的に明らかにすることにある。

2　アダム・スミス——基調としての貨幣数量説的「俗見」批判

▼数量説的「俗見」批判▼

周知のようにスミス（Adam Smith, 1723-90）は，『法学講義』（*Lectures on Jurisprudence*, 1766）においては，事実上，みずから貨幣数量説を説いて

いた[5]。しかし『国富論』(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776) になると，少なくとも基調としては，これに繰り返し批判を加える。彼のこの変化は，時として「経済学史上の謎」[6] とさえいわれる。しかしおそらくは，彼における（労働）価値論提示の帰結と考えられる[7]。その批判は，とくに「過去四世紀における銀価値変動に関する余論」のなかに集中的に見いだされる。この長大な「余論」の意図が那辺にあるかは必ずしも明らかではないが，主として，「不変の価値尺度」としての支配労働に準ずる尺度として穀物があげられたことに関連して，穀物価格の変動が穀物価値と貨幣（＝銀）価値とのどちらの変動に由来するかを究明する点にあったように思われる。その考察の基礎として，「あらゆる国の銀の量は富の増加につれて自然に増加するから，その価値はその量の増加につれて減少する」という「俗見」が「まったく根拠のない」ものとして斥けられ，これに彼自身の積極的な見解が対置されるのである。

「ある国における貴金属の量は，次の二つの異なる原因から増加するであろう。すなわち第一に，それを供給する諸鉱山の豊かさの増加からか，または第二に，人々の富の増大，つまり彼らの年々の労働の生産物の増加からか，である。これら両原因のうちの前者は，疑いもなく貴金属価値の減少と必然に結びつくが，後者はそうではない。

もっと豊かな鉱山が発見されれば，ますます多量の貴金属が市場にもちこまれるが，それと交換されるべき生活必需品と便益品の量は従来と同じなので，等量の金属は従来よりも少量の諸商品と交換されざるをえない。したがって，ある国における貴金属量の増加が諸鉱山の豊かさの増大から生じる限りでは，この増加は，その価値のなにほどかの減少と必然に結びついている。

これに反して，ある国の富が増加し，その労働の年々の生産物が次第にますます大きくなる場合には，ますます多量の生産物を流通させるために，いよいよ多量の鋳貨が必要になる。さらに人々は，そうする余裕がある。つまり，それと交換に与えるべきいっそう多くの商品をもっているから，自然に，ますます多くの金・銀器を購買するようになろう。彼らの鋳貨は必要上増加するであろうし，また彼らの金・銀器も虚栄や虚飾によって……彼らの間で増加しそうである。しかし彫刻家や画家が，貧困と不振の時期よりも富と繁

栄の時期に報酬が悪くなるようになることなどありそうにないのと同じように，金銀への支払が富と繁栄の時期にかえって悪くなることもなさそうである。」[8]

以上によって，貨幣数量それ自体の増加からただちにその価値の低下を説く「俗見」には「根拠のない」ことが示され，彼自身は，貨幣価値，というより流通手段としての貨幣の購買力が，流通の内部にもちこまれる諸商品の量と流通手段貨幣（＝鋳貨）量との相対的な関係により規定される，とひとまず考えている。というのは，鉱山の生産性の上昇の影響も，流通に入る金量の増大と流通諸商品量の不変とを対比して，前者の価値＝購買力の低下が導かれているからである。もしもそれだけであれば，彼の数量説批判は，ごく限られた意味の・もっとも素朴で部分的な数量説批判にとどまることになろう。

この点は，これに続くパラグラフにおける次のような主張からも裏書されるように見える。そこで彼は，もっと豊かな鉱山の発見のような反対に作用する原因がない限りは，一般に富の増進は「金・銀の価格」を高め，したがってそれは，貧国でよりも富国において高い，と説いているからである。[9]

ここにいう「価格」は，もちろん，金銀の支配労働量，現実的には諸商品購買力で表されるから，むしろ奇異な主張に思われる。しかしこの立論の背後には，富の増進に伴う諸産業における「改善」がインプリシットに想定されている。その結果，一定量の金の労働または諸商品支配量は増大するであろう。さらにこれに，富の増大に伴う・貨幣用および（奢侈）産業用の金需要の増大と，通例の金の年々の供給との関係から，金「価格」＝他財購買力の上昇が加わっている，と考えられる。とすれば，なお，早急な判断は差し控えられなればならないであろう。

一国に存在する貴金属の量とその「価値」に関して，いわば総括的に，ほぼ同旨の主張が繰り返されるが，事実上，うえの推論を裏づけるとともに，鉱山の生産性の変化自体が前面に押し出されるのである。

「……あらゆる特定の国におけるそれら［貴金属］の量は，二つの異なる事情に依存しているように思われる。まず第一には，それはその国の購買力，つまりその国の産業の状態，その国の土地および労働の年々の生産物に依存

するし，……また第二には，たまたまある特定の時期にこれらの金属を商業世界に供給する諸鉱山の肥瘠に依存している。……ある特定の国における貴金属の量が以上の二つの事情のうちの前者（購買力）に依存する限りでは，その実質購買力は，他のすべての奢侈品や贅沢品と同じように，その国の富と改善につれて上昇し，その貧困や不振につれて下落しがちである。……

ある特定の国における貴金属の量がうえの二つの事情のうちの後者（たまたま商業世界に供給する諸鉱山の肥瘠）に依存する限りでは，その実質価格，つまりそれが購買し，またはそれと交換されるであろう労働や生活資料の実際の量は，疑いもなく，これらの鉱山の豊かさに比例して多少とも下落し，またこれらの鉱山の貧しさに比例して上昇するであろう。」(10)

この叙述からすると，スミスにあっては，金価値は，鉱山の生産性と，富との対比における金の相対的な豊富・稀少との，二つの事情に依存する。しかしその生産性といっても，上来の引用から明らかなように，より豊かな鉱山から産出される・より多量の金と（この金量の増大とは無関係な事情――労働の生産力と「生産的労働」量――に規定される）富の大きさとの対比において，金量が絶対的にも相対的にも豊富になることを通じて，その価値＝「実質価格」が多少とも下落する，という把握と不可分であり，しかもむしろ，この量的側面の方が強調される。この点は，全般的改善が進む時に，銀需要がその供給を超えて増大すれば，銀価値は穀物に比して次第に上昇するし，豊鉱の発見のような「偶然事」が「多年にわたって」供給を需要よりも上回らせるならば，この金属は「安価」となり，需給がほぼ同じ割合で増加すれば，「いっさいの改善」にもかかわらず「ほとんど同量の穀物を購買する」という，「余論」直前の導入パラグラフに徴して，ほとんど疑問の余地がないであろう。(11)

してみれば，スミス金価値規定論は，究極的にはやはり需給論に帰着する，といえそうである。しかし，富の増大と無関係な金供給量の増大には常に鉱山の生産性への言及を伴うので，いま少し立ち入って検討する必要があろう。

▼金価値規定論のいっそうの吟味▼

「すべての金属の価格は，緩慢で漸次的に変動しがちであるとしても，他の土地生産物のほとんどどの部分よりも年々の変動が少ないし，また貴金属の

価格は，卑金属のそれよりも突然の変動をこうむることがさらに少ない。金属の耐久性が，この価格の異例の堅実さの基礎である。昨年市場にもちこまれた穀物は，今年の末よりはるか以前に，全部かほとんど全部が消費されるであろう。しかし鉱山から二，三百年前にもたらされた鉄のある部分は，いまもなお用いられているであろうし，二，三千年も前に鉱山からもたらされた金のある部分も，おそらくそうであろう。さまざまの年に世界の消費を充たすにちがいない穀物の量はさまざまであるが，それらは，それらのさまざまの年のそれぞれの生産物とほぼ釣り合っているであろう。しかし，この二つの異なる年に用いられる鉄の異なる量の比率は，それら両年の諸鉱山の生産高の偶然的な相違によってごく僅かしか影響されないであろうし，さらに金の量の間の比率は，金鉱山の生産高の同様の相違により，なおさら僅かの影響しか受けないであろう。……」(12)

直接には金属の耐久性に基づいて，その「価格」の他の原生産物価格に比しての相対的な安定性が説かれている。明らかにその根拠は，過去長年にわたり蓄積された金ストックの存在を前提にし，これによって年々の供給の需要に対する過不足が調整され，したがって年々の新産金産出量の変化はほとんど大勢に影響を及ぼさない，というのである。したがって，ポトシ大豊鉱の発見のような「偶然事」を除けば，金の年々の新産出＝追加はほぼ年々の摩損補塡需要に見合い(13)，フロウとしての需給はほぼ安定的に均衡し，したがってその「価格」も安定的，というわけである。このような事情から，ポトシ鉱山のような大豊鉱の発見によってさえ，銀価値の低下がイングランドの物価の上昇として現れるのに二十年も要した，と考えられているのである。(14)

以上から総括的に判断すると，スミスの場合，金価値を規定する究極の原因は鉱山の生産性（＝金生産・再生産に要する投下労働量）の増減にあるが，それによる価値の変化は相対的な需給関係を通して顕在化する，と考えられているように思われる。もちろん理論構成上，この二つの次元が截然と区別されているとはいえない。そうであるとすれば，彼の金価値規定論を単純に需給論と規定することは正確さを欠く。多分に需給論に埋没・解消されかねない剣が峰に危うく踏みとどまっている，とでもいうべきであろう。

関連して看過されてはならない点は，金の需給といっても，その追加供給のすべてが貨幣（優れて鋳貨）の追加供給になる，とは考えられていないことである。というのは，その一部は鋳貨の摩損補塡需要を充たし，また他の一部は什器等の奢侈品製造向けの産業用需要も充たし，この限りでは流通する貨幣の追加にはならないからである。また厖大な金銀ストックの存在の指摘も考慮に入れると，ここにインプリシットな退蔵貨幣の把握をも示唆されていると考えられる。富の増進につれて増加する貨幣量が流通に引き入れられる，という一貫する把握を想起すれば，この点はさらに強められよう。通常の事態においては，金の年々の供給がほぼ補塡需要や産業用需要に見合うとすれば，増大する流通必要貨幣量は，この貯水池から賄われるほかないであろうから。あえてつけ加れば（おそらく過剰解釈の謗りを免れないであろうが），富の増大による貨幣価値の（一時的な）上昇がこの貯水池から金を誘引する契機をなしている，と推測することさえ，あながち牽強付会とはいえないかもしれない。

してみれば，彼の数量説批判は，文言上は金量の増加をもってただちに貨幣（＝広義の流通手段）の追加と捉え，富との相対的関係を無視して諸商品価格の上昇＝貨幣価値の低下を説く素朴な数量説の批判に見えるが，概念や次元の混同を免れないとはいえ，かなり深い含蓄をもっている，と考えられるのである。そうしてそれらの洞察は，先行するジェイムズ・ステュアート（James Steuart, 1713-80）の影響もさることながら，事実と経験の考察から，少なくとも固有に根拠づけられた，といってよいであろう。

3　デイヴィッド・リカードウ——基調としての価値論の貫徹

▼初期リカードウ数量説の特異性▼

通説的にはリカードウ（David Ricardo, 1772-1823）は，典型的な数量説論者，しかもしばしばヒューム（David Hume, 1711-1776）と並ぶ代表者とされる。これには実はさまざまの限定が必要であって，彼の理論を典型的とすることにはかなり疑問があるが，ここではその点に立ち入らず，彼の叙述自体によって，おのずから通説の一面性を示唆することにしたい。さて初期

の（彼の主著『経済学および課税の原理』[*On the Principles of Political Economy, and Taxation*, 1817. 以下，たんに『原理』という。] 前の）リカードウは，『地金高価論』（*The High Price of Bullion, or a Proof of the Depreciation of Bank Notes*, 1810）に明示されているように，新産金の流入と銀行券の新規発券ないし発券増大とを同視し，それらがともに通貨の「相対的過剰」をもたらす限りで，その価値＝諸商品購買力を低下させる，と説いた。その意味で彼は，紛れもなく数量説を奉じている。しかしこのもとになお，彼がこの意味の通貨「価値」下落と不換銀行券「減価」(depreciation)，それに照応する為替相場の「実質的」(*real*) 下落と「名目的」(*nominal*) 下落とを識別している点を看過してはならない。この区別は，金を価値の尺度と価格の度量標準との双方を内包する「価値の標準尺度」(standard measure of value) と捉える見解に基づいている[15]。

すなわち，これによって彼は，事実上，価値尺度としての金価値の下落＝一般的物価騰貴（金地金価格は騰貴せず，為替の「実質的」下落［金輸出点内の］が生じ，それを超える時には海外金流出が生じる）と銀行券の「減価」＝一般的物価騰貴（金地金価格が造幣価格＝「価格の度量標準」を超えて騰貴し，為替は「名目的」に下落するが，金流出を伴わない）とを区別するのである[16]。かりにこの区別を無視すると，「地金の高価格」＝「銀行券減価の一証拠」という本書の「標題」の意味さえ掴まれえないであろう。つまり彼は，通貨「価値の低下」と通貨「減価」とを金地金の市場価格が造幣価格以下にあるか，それを超えるかを指標として区別しているわけである[16]。

▼連動論批判の論理▼

この尺度把握が彼を労働価値論に導くひとつの重要な契機をなす。その次第はすでに詳論したことがあるので[17]，要点を摘記するにとどめる。周知のように彼は，元来，スミスの構成価格論ないし生産費説の影響下にあって，労賃の騰落が相応する商品諸価格の騰落をもたらす，という賃金・価格連動論をとっていた[18]。しかし（交換）価値の「生産の難易」による規定を提示するにいたると[19]，この考えは影を潜める（『原理』の〈価値論修正〉は，連動論と理論の次元を異にすることに注意）。彼の連動論批判の論理は，まことにリカードウにふさわしく，連動論の徹底（＝価値尺度金属・金を含む全商

品への普遍的適用)にあった。すなわち,「貨幣も商品としますと,穀物と労働はその価格または価値にも入りこみませんか。そこでもしそれらが入りこむとしますと,どうして貨幣は,他のすべての商品が変化するのと同じ法則によって,穀物と労働に比べて変化してはならないのですか。」[20] と。金も同じく労働の生産物である限り,等しく連動論が妥当するとすれば,労賃騰落の前後で諸商品価格=金を尺度として表された諸商品の価値(彼に即していえば,諸商品と金との「交換価値」ないし「相対価値」)が変化する必然性はなくなる。対比される双方が同時・同方向に変化すれば,変化が相殺される結果,諸商品価格が変化するいわれはなくなるからである。こうして,この連動論による連動論批判から,投下労働量比による交換価値規定が抽出され,その系として賃金・利潤相反論が導出されたのであった。

この連動論批判に対するマルサスの反論は,理論的というよりは,むしろ実際的観点からのもので,「紙幣[による代替],鉱山の遠隔および数年間の新生産物の市場に及ぼす効果の些細といった理由のために,貴金属は,実際上は,他の商品と同様には影響されはしません。」[21] と,リカードウの主張を理論上は肯定しながらも,それの発現・顕化を否定する体のものであった。リカードウも,それらの事情のために貨幣=金価値の変化が他の商品のそれよりも緩慢なことは認める。しかし,「それにもかかわらずその価値は,他のあらゆる外国商品と同じように,それを市場にもたらす労働と費用に依存します」と答えて譲らなかった。[22]

次に見るように,この考えは『原理』においても保持される。ここでとくに留意すべき点は,両者とも,厖大な金ストックの存在を金価値の相対的安定に資するひとつの要因として容認していることである。

▼『原理』における金価値論▼

さて『原理』においては,土地生産物の価値は,社会の需要を充たす限りでの所要最終資本(彼特有の表現では「地代を支払わない資本」)のもとでの最大投下労働量によって規定され,労働価値論はこのような形態においてその妥当性を保つ[23]。もちろん,金にもこの「同じ一般的法則」が妥当する。[24] したがって,豊鉱の発見や採掘上の技術革新等は金価値を低下させるが,しかし「どんな事情から生じたとしても,その影響はきわめて緩慢かつ漸次的

であった」[25]，とつけ加えられる。

ここ（「鉱山地代」章）では，なぜ・いかにして「緩慢かつ漸次的」になるのかは説かれない。とはいえ，別のところでこれに言及している個所がある。「金という金属の市場における価値は，その他のすべての商品と同様に，究極的には，その生産の相対的難易によって規定される。そして，金という金属の市場価値は，その耐久的性質およびその数量を減少させるのが困難であることから，容易に変動させられるものではないけれども，しかも，金の数量を減少させることの困難は，金が貨幣として用いられるという事情から，大いに増大する。」[26] と。

このようにリカードウにおいては，イクスプリシットに金価値規定に「一般的法則」が適用される。そのうえで金の耐久性にもとづく厖大な金ストックの存在がその作用を「緩慢かつ漸次的」にする，と副次的に説かれる。こうして，スミスにおいてはいわば同次元に並列されていた二つの「事情」に，ともかくも，理論上の序次が与えられるのである。というのは，この金ストックは優れて金＝貨幣のストックと捉えられているからである。とはいえ，「貨幣としての貨幣」の一機能を果たす定在形態＝退蔵貨幣としてではない。金商品＝金地金としてのストック，いわば未鋳造の鋳貨準備および可能態としての世界貨幣の流動ストックとしてである。ここまでが，おそらく，貨幣ヴェイル観のもとでの把握の限度をなすであろう。

これに続く例示が，この点を有力に傍証する。すなわち，産業用に「消費」される金は，相応する供給で補塡されない限り，金量（＝現実および可能態としての貨幣）を減少させると考えられ，金ストックの一部をなすとは考えられていない。そうして，かりに産業用に需要される金供給が「差し止め」られても，厖大な金が貨幣として用いられている場合には，この金ストックの一部が産業用に転用されても，そのために金市場価値の早急な上昇は生じない，と論じられるのである[27]。

以上から『原理』のリカードウにあっては，貨幣として現に用いられている金＝鋳貨および即座に貨幣に転化可能な金地金（必要に応じて造幣局にもちこむこともできるが，しかしおそらく，その形態のまま，おもに「世界貨幣」として用いられる）が，無差別に現存金ストックに一括される。そうし

てこの厖大な金ストックの存在のために，年々の相対的に僅かな・新たに供給される金の「生産の難易」が変化し，それによって金価値が変化する場合にも，その影響は「緩慢かつ漸次的」にしか市場に感知されず，その市場価値は相対的に安定的に保たれる，と考えられているのである。もちろん，あくまでこの金ストックの存在は，価値論の「法則」としての究極的な貫徹を妨げるものではなく，その作用を緩慢化する副次的な，しかし現実の影響力としては無視し難い要因とされているのである。

4　トーマス・ロバート・マルサス——リカードウ価値論批判の一環として

▼リカードウ批判の基盤＝需給原理▼

すでに関説したようにマルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）は，現実の諸事情から金の価値規定を他の商品と同様には考ええないという見解を，リカードウに対置していた。彼の『経済学原理』（*Principles of Political Economy considered with a View to their Practical Application*, 1820）においては，需給による交換価値・価格の規定を「一般的」原理であるばかりでなく，供給継続の必要条件をなす生産費＝「必要価格」を構成する生産諸要素価格（＝分配分）をも規定するという意味において，事実上，「究極的」な原理である，と説いた。

この観点から彼は，スミスの生産費説にも一定の批判を加えるが，とりわけリカードウの労働価値論を一貫して詳細・執拗に批判する[28]。そうしてその一環として彼は，金を「不変の価値尺度」とするリカードウの主張に対して，その「価値」章に一節を設けて論評するのである。

▼批判の要点と彼の積極的主張▼

その主要な論点は，次のように要約できる。①金は不変の労働量の生産物ではありえない。②かりに不変の労働量の生産物でありえたとしても，商品の交換価値は投下労働量に「めったに比例しない」。③資本を用いて生産される場合には，資本構成等の再生産諸条件を等しくする商品についてのみ正確な尺度であるにすぎない，等々。[26] おおよそ「価値」章・前節までの批判を踏

まえてのものである。

しかし，続いて付随的にではあるが，事実上，リカードウの金価値規定への労働価値論の究極的貫徹論を標的にして，次のように論評する。

「しかしここで触れた諸原因とは無関係に，貴金属には，それらに特有の変動の源泉がある。貴金属は，それらの耐久性のゆえに，ほかの諸商品の品質の多様性やそれらの生産に伴う便宜の変化に適応するのが緩慢かつ困難である。金銀の市場価格は，その需要と比較された・市場における分量に依存する。そうしてこの分量は，一部分は数百年の蓄積によって生みだされたものであり，そのため鉱山からの年々の供給によっては緩慢にしか影響を受けない。

リカードウ氏によって正しく述べられているように，すべての商品の市場価格と自然価格との一致は，どんな時でも供給の増減を左右できる容易さに依存している。そこで彼は，金または貴金属はこの変動が速やかには生じえない商品のうちに入る，ととくに注意している。したがって，かりに製造業と農業の双方で大きくて突然の機械の改善により，生産の容易さが一般的に増大し，人々の欲求がはるかに少ない労働で充たされるようになったとすれば，諸商品と比較して貴金属の価値が大いに上昇するのは当然である。しかしながら，貴金属の分量は短期間には適切に増減されえないので，諸商品の価格は，それらに用いられた労働量を表さなくなるであろう。」(29)

続いてマルサスは，金価値の国民的相違に関わる論述に進むが，いまは立ち入るに及ばない。批判の趣旨は，あくまでリカードウの労働価値論批判にあり，それを斥ける論拠のひとつとして，スミス以来の，そうしてリカードウ自身も認める事情が提示されていることを確認すればたりる。というのは，彼の「一般原理」としての需給論に基づく限り，それでもって必要かつ十分な反論をなす，と考えられようからである。

以上に対する『マルサス評註』におけるリカードウの反論は，金を「不変の尺度」と仮定したのは，「混乱せずに他の物の［価値］変動を語るため」であって，そのために考慮外とした金価値変動の原因を指摘・列挙して，その価値の可変性を説いても，それでもって「私に答えることになるのか」と反論する(30)。彼の場合，金＝貨幣価値の変動は，諸商品価格を一様に変化させ

るだけであって，諸商品相互の「相対価格」を変化させない。したがって，この「混乱」を除き，諸商品の価格変動がもっぱら各商品の価値変化に基づくことを明確にするために，金価値不変，と仮定したのである。究極的には，交換価値・価格の変動を説明する根拠として「絶対価値」にゆきつき，この「絶対価値」の変化を紛れもなく示す媒介として，リカードウは「不変の尺度」を仮定する(31)。需給原理にすべてを委ねるマルサスにとっては，この仮定は，所詮，誤った労働価値論への固執に基づく没理論的で超経験的なものとして，とうてい受け入れられえなかったのである。

5　ジョン・フラートン——金価値の相対的安定性の論拠

▼信用貨幣の価値安定性（＝物価に対する中立性）の一基盤▼

周知のようにフラートン（John Fullarton, *c*. 1780-1849）はトーマス・トウ ーク（Thomas Tooke, 1774-1858）と並ぶ銀行学派の代表であり，とりわけ「還流の法則」（Law of Reflux）の定式者の一人として，金融論史上つとに著名である。信用貨幣としての銀行券は，国家紙幣と異なり，その需要に随順して貸付・発行され，貸付期間満了に伴って発行者のもとに返済を通じて「還流」し，流通界に滞留・累積して過剰になることはない。さらにその過剰化は，究極的には，請求次第兌換可能という「還流」のルートによって防止されている。したがってそれは，物価に対して中立的であって，それを上昇させる力はない。行論に必要な限りで彼（とトウ ーク）の主張を要約すれば，おおよそこのようであろう。

しかしながら，信用貨幣（さしあたり，銀行券）自体の「価値」の安定性とは，それの化体・代表する金量目の確定・固定を意味するにとどまり，代表される金自体の価値の安定性を少しも意味しない。したがって，それの代表する金量目がいかに確定的であろうと，肝腎の金価値自体が変動常なければ，たとえ銀行券流通量が適正に需要に適合する範囲に限られていたとしても，その「価値」もまた金価値とともに変動せざるをえない。してみれば，銀行学派の力説する・信用貨幣の物価に対する中立性の主張は，この限りで基盤を掘り崩され，説得力を失いかねないであろう。彼において，金価値の

相対的安定性が説かれざるをえない所以である。

▼金価値安定性の論拠▼

このような接近の視角からして，フラートンにとっては，金価値の理論的規定自体は，もはや，問題ではない。その価値がなによって・いかに規定されようとも(生産費あるいは需給関係のどれであれ)，それにも拘らず，金価値の相対的安定性（不変性）を説くことができさえすれば，必要かつ十分である。この問題視角の限局性こそ，理論としての経済学の衰退を如実に物語るであろうが，いまは論外としよう。

おおよそこのような接近から援用される論拠が，次に見るように，スミス以来の貴金属の耐久性に基づく厖大な金ストックの存在である。とはいえ，彼の場合，貨幣の諸機能の多面的な認識という注目すべき把握のもとに。

「……上来の諸原理［とくに「還流の法則」］は，銀行家の側から物価に影響を及ぼすことができるような紙券の過剰発行が可能だという考えを，いっさい排除する。真の兌換通貨の価値は，それが兌換可能な鋳貨の価値と常に同一であるに違いなく，だから，もっぱらこの鋳貨の価値の変動に伴って変動することができるだけである。実際，これはあまりにも自明の命題なので，なんら論証を要しない。しかし，金銀貨幣または金属に基礎を置く信用貨幣の交換価値が，諸鉱山の生産力の変化に由来する変動をこうむる場合でさえも，その変動は，時折想像されてきたのよりはるかに重大ではない。これまでの議論で私は，他の諸商品に生じやすいのとまったく同様に，貴金属も，生産費または供給の需要に対する比率の時々の変化から，絶えず繰り返される価値の変動をこうむりがちだ，ということを当然のことと認めてきた。しかし実際はそうではない。これらの物質に関しては，価格の一般的法則の作用を実質的に修正する・いくつかの事情が存在する。それらの事情は，一部は金属自体の特有の性質から生ずるが，主としてまたとりわけ，それらの金属が貨幣として営む諸機能，ならびに，この資格において全世界を通じて見いだされる・それらのほとんど普遍的な受領性に結びついている。これらの金属に特有の耐久性は，もっとも早期の時代から，これらの金属の巨大なストックが蓄積されるのに好適であった。――このストックは，通例その言葉が理解されるような消費に対する需要と，まったく不釣合いである。しかも

文明社会のあらゆる所で人が使用する必要があるか，または使用することが望ましい・いっさいの物を支配する力をもつし，また，その価値に比べて嵩が小さいため，財産の安全が保証されない国々では，万一の場合にこれを安全な所に隠匿または転送するのに，ほとんど他のいかなる種類の富よりも簡便という，貨幣としての・普遍的等価物としての特有の性質のために，金銀を所有しようとする一般的な渇望が，巨大な退蔵の形成をもたらした。この退蔵貨幣は，あらゆる国の流通経済上一役を演じているが，私の判断できる限りでは，その重要性は，これまで一度も十分に評価されたことがない。……この巨額の財宝は，諸鉱山の生産性の不時の異変を補正し，年々の金属の供給を均等化する・ほとんど測りしれない源泉を供与する。諸鉱山からこの貯蔵に年々寄与される追加分は，通例の時には，おそらくその間の損耗による減耗分を補充するにたるだけのものをほとんど超えず，総ストックに対するその比率が四分の三パーセントよりもっと少ない端数を超える，とは考えられない。そこで，このような変動が何年間も持続し，繰り返されない限りは，たとえ補塡されない場合でも，市場に及ぼす影響は，まったくとるにたりないであろう。しかし，そうでなかったら一般物価の目盛りに生じがちな程度の乱れでさえ，退蔵貨幣の介入によって大部分相殺される。この退蔵は，鉱山から溢流する際には，その過剰な生産物を吸収し，使用が求められる時にはそれを吐き出す。そのために供給の変動は，通例の事態では，鋳貨のうち・それだけが物価に作用する部分［＝流通鋳貨量］にはまったく影響を及ぼさず，退蔵されている部分に影響するだけである。この退蔵の原理を活動させるためには，物価に対するなんらかの作用が前もって存在する必要もない。退蔵の額が作用を受けるのは物価の状態によってではなく，市場利子率によってであり，……。」(32)

このようにフラートンにあっては，厖大な金ストックの存在という把握はスミス以来の古典学派と共通するとはいえ，それが貴金属の耐久性を前提にして形成される理由も，それの果す役割も，ともに，多面的な貨幣機能の認識，それに対応する貨幣の多面的な定在形態（普遍的等価物，退蔵貨幣）の把握に基づいて説かれる。すなわち，物価に作用するのは鋳貨中の流通部分に限られ，鋳貨形態においても（おそらく地金の形態においても）その商品

経済における「普遍的」な等価ゆえの一般的な「受領性」のために，絶対的な富として退蔵され，国内的・国際的な流通の必要に応じて（といっても，彼の場合は利子率の変動に媒介・誘導されて）流通界に流入，またはそこから退出する退蔵貨幣（および，事実上，世界貨幣の準備）として明確に把握されている。ここに，職掌としては貨幣をもっぱら流通手段としてのみ一面的に捉える古典学派に優る・彼の卓越した認識がある。しかし同時にそれは，金について「価格の一般的法則を実質的に修正」する作用をもつものでもあった。まさしくここに，彼の限られた・むしろ転倒した視角からするアプローチの制約ないし限界が示されているのである。

▼J. S. ミルについての補足▼

フラートンとほぼ同時代のジョン・ステュアート・ミル（John Stuart Mill, 1806-73）のこの問題に対する見解は，とくに別項を立てるほどの独自性はなく，むしろ，フラートンに追随しているように思われる（もちろん，古典学派に通暁している彼が独自にこの見解に到達した可能性は残るが，信用貨幣に関しては，紛れもなく銀行学派の強い影響下にある）。このため，補足的に関連する引用文を掲げるにとどめる。もっともその論述が，貨幣価値についての他の一連の叙述と両立するか否かは別個に検討を要する課題をなすであろうが，ここでは立ち入ることを避ける。ミルにあっては，金価値の相対的な安定性は，むしろ転倒的に，それが流通手段（広義）に適合する「特性」のひとつをなす。

「……あらゆる商品のうちで金銀は，価値の変動をひき起こすもろもろの原因のどれによっても，もっとも影響されることの少ない物のひとつである。このような変動をまったく免れる商品は，ひとつもない。アメリカの鉱山の発見によって，金銀も有史以来の価値の一大変動をこうむった。……けれども，一般的にいえば，これほど変動の原因の作用を受けることの少ない商品はない。金銀の生産費は，他のどんな物のそれよりも，僅かしか変動しない。しかも金銀の耐久性のために，その現存総量は，いつの時にも，年々の供給量に比して非常に大きいために，生産費の変化が価値に及ぼす影響でさえ，それほど急激ではない。というのは，その現存量をかなり減少させるには長い期間を要し，現存量を大いに増加させることさえ，早急には進まないから

である。したがって金銀は，ある長い期間の後に一定量を授受しようとする契約の対象となるのに，他のどんな商品よりももっと適している。……」(33)

6　マルクスの示唆の意義

▼考察の総括▼

以上の考察から明らかなように，リカードウを除き，一般的にはスミスを踏襲しながら新産金の価値，つまりは金の再生産費が金総体の価値に影響を及ぼすことは理論的に認めながらも，年々の新産金が現存金総量に比してネグリジブルなほど僅かなことを論拠に，これを新産金と同次元に並置して，金価値規定の修正＝その相対的安定性が説かれる。そこでインプリシットに念頭に置かれているのは，新産金価値と現存金の所与の価値との・いわば加重平均として金総体の価値が与えられるという「修正」であるように思われる。というのは，前者のウエイトがネグリジブルだから金価値は相対的に安定的，といわれるからである。そうしておそらくは，事実上，金価値規定の現実的「法則」はこうである，とさえ。

この潮流にあって，リカードウを際立たせる特異性は，新産金の価値による金総量の再評価が究極的に貫くとし，これをあくまで「一般的法則」として固持し，そのうえで現実的な考慮事項として上述の「修正」を副次的に位置づけているところにある。したがってそれは，「一般的法則」が究極において顕現するにいたるまでの，いわば「過渡的」な，したがって理論的というよりはむしろ現実的な説明のための付加事項とされているのである。

とはいえ，おそらくはリカードウも含めて古典学派は，この「一般的法則」の「修正」または「過渡的」な作用がいかに作動するかについては，具体的な解明を怠っている。というのは，「一般的法則」の「修正」の観点からは，新産金と既存金とが金価値規定上同じ次元に並置され，量的な大小が規定上のウエイトの軽重に反映されれば十分であって，その意味で両者が質的には同等の資格で価値規定に参与する仕組みになるから。とすれば，これ以上に立ち入った解明は，実証的にはともかく，理論的には進められようがない。

他方リカードウの場合，彼の圧倒的な関心が究極の帰結の解明にある限り

は，おそらく「過渡的」な作用ないし状況の解明は二次的・付随的であって，必要な場合に言及されれば十分，と考えられている。

フラートンの貢献は，金価値規定自体にではなく，貨幣の機能・定在形態の多面的な把握を通じて，金ストック自体を明確に貨幣のなかに取り込み，この側面から金＝貨幣商品の価値規定「修正」の態様を説明する土台を整えたところにあろう。

▼マルクスの二つの金移動「区別」の意味▼

このような歴史的な理論状況を背景に，マルクスの本稿冒頭に掲げた「区別」を顧みれば，おおよそ次のように，その意味を捉えることができるであろう。

すなわち，まず金価値規定に限っていえば，彼の叙述は，①金価値は生産源での「物々交換」で与えられ，②その新産金の価値とその変化は，他のすべての諸商品と同様の「法則」に従い，そうしてその価値＝再生産費が究極的には既存金をも含む金総量の価値を規定し，その再評価をもたらす。③本稿では立ち入らなかったが，同量の金が国民的に相違する価値をもつため，世界市場においては金価値は均一・均等ではないことも考慮に入れると，具体的には金価値はそれぞれの国民的価値（国民的な労働強度等の差異に規定される）を個々のエレメントとするひとつのヴェクトルをなして存在するから，生産源で与えられる金価値は，このヴェクトル全体を相応する方向に動かすというかたちで究極的には作用するであろう。

以上はいずれも「一般的法則」の貫徹を説くものにほかならないが，これらを整合的に解明するモデルにおいては，その少なくともひとつの要件として，貴金属の国際的移動について，新産金の移動・配分と既存金の国際的「振動」とが区別されなければならない。これは過去の経済学「批判」の総括としてそうである。というのは，そうでなければ，新産金と既存金とが同次元に並置され，「一般的法則」の事実上の「修正」という名のもとに，ここでは「一般的法則」の実質的放棄という帰結がもたらされることは必至だからである。

[註]

(1) *Vgl*. Karl Marx, *Das Kapital*, Dietz Verlag, 1953, Bd. I , Kap. XX , bes. S. 587. 向坂訳『資本論』(岩波文庫), (三), 第20章, とくに, 91ページ以下, 参照。

(2) *Ibid*., Bd.III, S. 612. 同上, (七), 381-2ページ。ただし, 訳文は必ずしも従わない(以下, すべての邦訳について, 同様)。

(3) Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Verlagsgenossenschaft, 1934, S. 34. 武田・遠藤他訳『経済学批判』(岩波文庫), 77-8ページ。

(4) *Das Kapital*, Bd. I , SS. 97-8. 上掲邦訳, (一), 164-5ページ。

(5) *Cf*. Adam Smith, *Lectures on Jurisprudence*, 1766 (LJ[B]), in *ibid*.,ed. by R. L. Meek and D. D. Raphael, Clarendon Press, 1978, pp. 506-7.

(6) Jacob Viner, *Studies in the Theory of International Trade*, 1937, Reprinted in 1955, p. 87.

(7) 旧稿に属し, 必ずしも十分ではないが, さしあたり, 小稿「スミス貨幣・信用理論の研究」, 大分大学『経済論集』, 15-1～16-4, 1963～65年, 第一章, 参照。

(8) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Clarendon Press, 1976 (Hereafter briefly referred as *WN*), pp. 207-8. 大内・松川訳『諸国民の富』(岩波文庫), (二), 96-7ページ。

(9) *Cf*. *WN*, p. 208. 同上, 98ページ, 参照。

(10) *WN*, pp. 253-4. 同上, 192-3ページ。

(11) *WN*, pp. 194-5. 同上, 72ページ。

(12) *WN*, p. 228. 同上, 141ページ。

(13) *Cf*. *WN*, pp. 225-8. 同上, 134-40ページ, 参照。

(14) *Cf*. *WN*, pp. 210. 同上, 103ページ, 参照。

(15) David Ricardo, *The High Price of Bullion, a Proof of the Depreciation of Bank Notes*, 1810, in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa, Cambridge University Press, 1951-5, Vol.III, pp. 54-5, 60, 65-6 and 84 (Hereafter referred as *Works*). 傍点は原文のイタリック。邦訳『リカードウ全集』, 雄松堂には原本ページが付記されているので併記を省く。

(16) リカードウが金地金市場価格を基準とする発券調整を説くことを理由に, 彼における数量説の存在を否定する見解がある(佐藤有史「現金支払再開の政治学—リカードウの地金支払案および国立銀行設立案の再考—」, 一橋大学社会科学古典資料センター, Study Series No. 41)。しかしこれは, 通説と逆の一面性に陥っている。

(17) 詳しくは, 小著『リカードウ経済学研究』(九州大学出版会, 1996年), 第1章「リカードウ労働価値論成立の論理」, 参照。

(18) *Cf*. *Works*, VI , pp. 108 and 114.

(19) *Cf. ibid.*, p. 163 and Ⅳ, pp. 19-20.

(20) *Ibid.*, Ⅵ, p. 203.

(21) *Ibid.*, p. 209.

(22) *Ibid.*, p. 211.

(23) *Cf. Works*, Ⅰ, pp. 73 and 85-6. 羽鳥・吉澤訳『経済学および課税の原理』(岩波文庫), 上巻, 110 および127ページ, 参照。ちなみに, ここでリカードウは, 製造品の価値もこのいわば「限界原理」によって規定されると説くが, これは彼の理論の基調に反する (さしあたり, *cf. ibid.*, p. 250. 同上, 下巻, 56ページ, 参照)。

(24) *Ibid.*, pp. 85-6. 同上, 上巻, 126-7ページ。

(25) *Ibid.*, p. 86. 同上, 127-8ページ。

(26) *Ibid.*, p. 193. 同上, 266ページ。

(27) *Ibid.*, pp. 193-4. 同上。

(28) 詳しくは, 上掲小著, 第3章「マルサスのリカードウ価値論批判」, 参照。

(29) Thomas Robert Malthus, *Principles of Political Economy considered with a View to their Practical Application*, 1820, pp. 108-111. 小林訳『経済学原理』(岩波文庫), 上・下にはこの初版のページが付記されているので, 指示を省く。ちなみに, *Principles*, Variorum Ed., ed. by J. Pullen (Cambridge University Press, 1989) の本文 (Vol. Ⅰ) も, 初版のコピー。

(30) *Ibid.*, pp.111-2.

(31) Ricardo, *Notes on Malthus's Principles*, *Works*, Ⅱ, p. 83.

(32) John Fullarton, *On the Regulation of Currencies*, 2nd Ed., 1845, p. 69*ff*. 福田訳『通貨論』(岩波文庫), 96ページ以下。

(33) John Stuart Mill, *Principles of Political Economy*, in *The Collected Works*, Toronto University Press, Vol. Ⅱ, p. 504. 末永訳『経済学原理』(岩波文庫), (三), 107ページ以下。